慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	なぜ福沢諭吉はユニテリアンに関心を失ったのか： ナップの手紙が明らかにする新事実
Sub Title	Why did Fukuzawa Yukichi lose his interest in the Unitarians? : some new facts the letters of Arthur May Knapp reveal
Author	土屋, 博政(Tsuchiya, Hiromasa)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2002
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 英語英米文学 No.41 (2002. 9) ,p.66- 101
JaLC DOI	
Abstract	The Japan Unitarian Mission was in a crisis of getting no financial support from American Unitarians any longer in late 1896. Then, Clay MacCauley, its superintendent, went back to the U.S. in the next early spring to appeal to them. As a result, he succeeded in persuading them to support the Mission again. His return to Japan was, therefore, supposed to be a very happy one. But, in fact, he did not have "the pleasantest kind of a homecoming", because he had scarcely landed before he heard that he must leave his house as soon as possible. Fukuzawa had been waiting simply for his return to get him out. Keio-gijuku was expanding fast and needed the land on which his house stood, for dormitories to be built at once. MacCauley was perplexed. He could find no available house. In his own words, "Almost in despair I concluded to house myself for a time in our hall." Why was Fukuzawa unwilling to supply another house to MacCauley? The answer was simple: he had lost his interest in the Unitarians while MacCauley was away. The letters the former superintendent, Arthur May Knapp, wrote to the A.U.A.(the American Unitarian Association) in 1897 reveal what happened to Fukuzawa. Knapp returned to Japan "almost exactly synchronous with MacCauley's departure". Fukuzawa welcomed him warmly. One of Knapp's letters tells us that Fukuzawa took him into his confidence and regard more than ever. People called him the second Dr. Simmons, because up to the time of his death the latter had been for thirty-years Fukuzawa's most intimate friend and trusted counselor. Fukuzawa had been contemplating changes in the organization of his university at the time, and asked Knapp for his assistance in the matter. Knapp's radical plan included the following ideas: that the institution would take upon itself an international character seeking a close affiliation with like institutions in America, and that the constitution would be altered so as to permit the appointment of Knapp, and other Americans to be named by him, to the Board of Overseers. Fukuzawa was pleased with his plan and talked of incorporating the Unitarian seminary, Senshin-gakuin into Keio-gijuku. He was confident that the A.U.A. would back up Knapp. As Knapp feared, however, his scheme could not be carried out without the support of MacCauley, who was the representative of the A.U.A., since Knapp had no official position. Unfortunately the two were on bad terms. Consequently, the plan was not approved. Now we see why Fukuzawa was disappointed in Knapp, MacCauley and the A.U.A.. Less than a year later Fukuzawa had a stroke.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10030060-20020930-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

なぜ福沢諭吉はユニテリアンに関心を失ったのか

——ナップの手紙が明らかにする新事実——

土 屋 博 政

Ⅰ．問題の所在

福沢諭吉はアメリカ人のユニテリアン宣教師アーサー・メイ・ナップが日本に1887年（明治20年）にやって来た時から，一貫してユニテリアンの強い支援者であった。ところが福沢は1897年（明治30年）11月頃，突然ユニテリアンに失望し，関心を無くしてしまった。この突然の彼の変貌振りを示すエピソードをまず示そう。

ナップを派遣した本部のアメリカ・ユニテリアン協会（A.U.A.）では，ナップを遣わしてから9年経った1896年（明治29年）に日本ユニテリアン・ミッションの存続問題が議論されるようになっていた。1890年11月末ナップが病のため帰国した後，二代目の日本ユニテリアン・ミッションの監督者となったクレー・マコーリィは，そこでミッションの存続を訴えるために1897年2月末に日本を発った。アメリカでの彼の熱意ある説得で日本のミッションの存続は認められることになった。かくして彼の9ヶ月にわたる説得の旅行は成功裡に終わった。マコーリィは気分良く，そして決意も新たにして11月下旬に日本に戻った。ところが彼の楽しい帰還を一気に吹き飛ばしてしまう事態が日本で待ち受けていた。彼が日本に上陸するや否や，彼は自分の家があった三田の屋敷から直ちに出ていってくれという通告を福沢の使いの者から受けたのである。三田のキャンパスにある彼の家は，元来福沢の親友ドクトル・シモンズの家として建てられた

もので，1889年にシモンズが亡くなった後，福沢の全くの好意によってマコーリィに提供されたものであった。彼は1890年の10月半ばからこの時まで7年余りその家に住んで来たのである[1]。マコーリィは，この時の衝撃的な事態を1897年12月17日A.U.A.の副幹事ジョージ・フォックスに宛てた手紙で次のように記している。

「この手紙は最近私が経験した出来事をお知らせするメモに過ぎません。私は今から3，4週間前日本に戻りましたが，帰郷という楽しい気分になれませんでした。というのは上陸するや否や，出来るだけ早く私に家を出てほしいという話を聞いたからです。慶應義塾の家主は私が一刻も早く屋敷から出るのを待ち受けているというのです。私の家屋がある敷地に建つ学校は今急速に大きくなっていて，直ちに寄宿舎を建てねばならず，私の家が建っている土地を必要としていたというのです。何事も直ちに取り掛からねばならないことですが，今日本は価格が“急騰”しているので，利用できる家を私はなかなか見つけることが出来ませんでした。殆ど絶望的になって，やむなく私はしばらくの間，私たちのホール（引用者註：惟一館）に住むことに決めました。（中略）今大学生のような生活をしています。」

これまでの福沢のユニテリアンに対する好意的な態度を考えると，マコーリィに対するこうした対応には何か釈然としないものがある。そう感じるのは，筆者ばかりではないであろう。寄宿舎を建てねばならないため，マコーリィの家を必要としたという立ち退き理由は，尤らしく聞こえる。しかし寄宿舎増設のためマコーリィの家がある土地を必要としているといっても，別に家を取り壊す訳ではなかったし，マコーリィが出た後，屋敷に住み込んだのは福沢の女婿潮田傳五郎であった。こうした事実を知ると，マコーリィが立ち退く必要性がどれほどあったか疑問となる。とにかく福沢が取った態度はあまりにも事務的な処理の仕方で，長年の友人に対して取るべき態度とは思われない。何か福沢に冷たさを感じる。突然のことで，帰国したばかりのマコーリィにとって早速住む家を探すのは大変であったろう。そんなことぐらい十分福沢は承知していたはずである。普段の福沢であれば，三田の屋敷に替わる家を準備しておくだけの親切心は持ち合わ

せたことであろう。それを敢えてしなかった。なぜなら後で詳らかにするが，福沢はこの時ユニテリアンを支援する気持ちを既に失っていたからである。あるいはひょっとして，その時の事情を考えると，福沢はマコーリィ個人に対して反感すら抱いていたかもしれない。そうとは知らないマコーリィからすれば，アメリカへ向けて日本を出国するまで福沢との関係は，ナップが証言しているように，良好であったので，日本に帰ってくるなり，家を出てほしいと言われたことは驚きであった。彼は福沢の言葉に戸惑っただけでなく，福沢に失望すら感じたに違いない。当然のことながら，この事があって以来，マコーリィと福沢の関係は冷え，両者は疎遠になってしまったのである。従って、1900年3月にマコーリィが10年間の日本滞在を最終的に終え、アメリカに帰る際も、福沢は日本ユニテリアン協会主催の送別会に出席することもなかったし、彼の方からマコーリィのために送別会を開くこともなかった。

ではなぜ福沢は1897年末に，突然ユニテリアンに関心を失ったのか。これを考察することが本論文の主たる目的である。

Ⅱ．ナップの４通の手紙

ここにアーサー・メイ・ナップの大変興味深い4通の手紙がある。これらの手紙はいずれも，ナップが1897年春来日の際，その前後にA.U.A.幹事バチェラーに宛てて書いたものである。筆者はハーヴァード大学のアンドゥヴァー・ハーヴァード神学校図書館記録保管所において，内外の宣教師たちの手書き書簡を束ねた膨大な量のAUA Letter Booksの中から，これらの手紙を発見した。そしてナップの癖のある手紙を時間を掛けて何とか読み通した時，その書かれている内容の重さに改めて驚かされた。そこには，福沢が1897年になぜユニテリアンに突然関心を失ったかの疑問を解明する情報ばかりでなく，これまで知られていなかった重大な情報が幾つも記されていたからである。これらの手紙の内容は，日本のユニテリアン

研究のみならず，福沢諭吉研究にも新たな光をあてるものである。そのような訳で，これらの手紙をここに筆者の考察を加えながら発表する次第である。

既述したように，ナップは1890年に体調を崩したため，日本ユニテリアン・ミッションの監督者の職をクレイ・マコーリィに譲り，11月末にアメリカに帰った。その後1892年の春と93年の夏二度ほど日本を訪れる機会があったが，いずれも単身で，短期滞在であった。しかし1897年春の来日の際は，妻と息子を同伴していた。この時ナップは日本に長期滞在する決意を持ってやって来たのであった。

《ナップの第1の手紙》

最初に取り上げるナップの手紙は，彼が来日する直前に出した手紙である。1897年5回目の来日の際，ナップは3月7日付のバチェラーに宛てた手紙で，まず自分の立場と身分に関して次のように述べている。

「親愛なるバチェラー様，

私の日本滞在中，私が私たちの宗派の機関誌に提案めいたことを述べました件に関してですが，私が提出した案は，恐らく理事会で誤解されたかもしれませんので，以下のような言葉で再度その件について申し上げたく存じます。

日本のミッションといかなる直接的，あるいは公式的な関係を持つことは私の望むところではありませんが，私に開かれた間接的な方法でミッションを援助することであれば，喜んでさせて頂く所存であります。そしてそのためであれば，理事会にご負担をお掛けせずに，進んで自分の時間と労力を提供致します。現在私たちのユニテリアン諸教会は，日本のミッション事業の詳細は勿論のこと，その一般的な性格に関してあまりにも知らな過ぎます。そしてその結果として無関心になっています。こうした状況を考慮してみました時，私は私たちのプレスばかりでなく，私の友人が牧会をしております幾つかの有力教会とも，現地におります間，定期的に通信をなすことでお役に立てるのではないかと考えました。勿論そうした仕事を私は自由に独立した立場でやりますが，出来ればそうした仕事を引き受けるにあたり，理事会の委任を裁可して頂きたいのです。そうした委任があれば，マコーリィ氏と

も全面的に相談出来ますし，協力して仕事がなしうることでしょう。」

以上のようにナップは，今回の日本行きの目的を語り，それと共に自分の自由な立場での働きとその立場を公式に認可して欲しいとA.U.A.に求めている。そしてナップはこの手紙の最後に，マコーリィがボストンのA.U.A.本部を訪問する予定日の何週間か前に日本に到着するので，未だ時間が十分あり，彼とこの件に関し手紙で相談するつもりであると述べている。尚，筆者は，A.U.A.がナップの委任を認めるような文書をハヴァードで見つけることが出来なかった。ということは，恐らくA.U.A.はこの件を裁可する必要を感ぜず，ナップに委任状を出さなかったものと思われる。

《ナップの第２の手紙》

次ぎはナップの２番目の手紙である。日本に到着して最初に出したバチェラー宛ての５月５日付けの手紙で，ナップはまず，

「親愛なるバチェラー様

到着以来緊急に家探しをせねばならず，ここ日本のユニテリアン関係の状況を確かめる機会が殆どありませんでした。しかし皆様にお役に立ちそうな情報をいくらか集めることが出来ました。」

と述べる。筆者が少し奇妙に感じるのは，ナップが日本に来て，かつての仲間とまったく接触しなかったということである。ナップは来日前３月７日に出したバチェラーへの手紙では，直接的な方法でないとはいえ，日本のユニテリアン・ミッションを援助すると言っていたが，日本に来ても，この第２の手紙を出す時点まで，ミッションの人々に全く挨拶に行ってもいないのである。挨拶に行くのを躊躇わせた事情は，彼の後の手紙で釈明されるが，それが何であれ，来日しても直ぐに仲間に会いに行かないというのは，やはり彼とミッションとの隔て垣がかなり大きかったことを物語る。この点は後に詳しく述べるが，個人的な感情からしてもナップがマコーリィに対して相当距離を感じていたことは確かである。

マコーリィのほうはナップよりももっとはっきりしていて，ナップに対して強い拒否反応を示していた。例えば，この年２月18日のバチェラー

宛の手紙で，ナップの来日の計画を聞いたマコーリィは，ナップとは一緒に仕事をしたくない，もしそういう事になれば，自分が仕事を下りるとすら言っていた。また彼が4月17日バチェラー宛てに書いた手紙の中では，日本に再渡来するという内容の手紙をナップから直接受け取り，“かなり戸惑い，驚いている”と率直に不快感をあらわにし，ナップに会うことを“危機”（a crisis）と表現している。

いずれにせよ，ナップが惟一館を訪れたのは，来日してから何ヶ月も経ってからのことであった。これは7月28日付けバチェラー宛てのマコーリィの手紙によって分かる。その手紙によると，マコーリィのところに神田からの手紙が届いて，ナップがやって来て，神田にアメリカのユニテリアンは日本のミッションに失望していると伝えたという。神田がこうした内容の手紙をマコーリィに書いてきたのは，到着後何ヶ月も音沙汰なしで，突然姿を現すナップの不可解な行動に彼が戸惑いを感じたことと関係があるであろう。神田にナップに対する信頼があれば，ナップに不利になる様な書き方をするはずがないからである。

またマコーリィの同じ手紙は，「今ドロッパーズ教授はこの国にいます」と記しているので，当時アメリカに戻っていたドロッパーズも，マコーリィに会っている。そして驚くことに，そのドロッパーズが，ナップはミッションに野心を持っているようだ，とマコーリィに言ったというのである。この年まで日本にいて，ナップにしばらく会っていないはずのドロッパーズまでが，何故この様なナップに関する由々しき発言をなしたのであろうか。ナップが福沢に大胆な計画を提案するのは10月であるので，この時のドロッパーズが知るよしもない。確かに，ナップは以前1893年にバザーの資金集めの目的で，日本の骨董品を買いにやって来た時，ミッションの誰とも会おうとしないことがあった。こうした理解し難いナップの行動に対する不信感が記憶に残っていたためであろうか。それは全くわからない。が，いずれにせよ，ナップはミッションに野心など持っていなかったことは，彼の手紙を見ても明らかである。全くの誤解と思われる。彼らユ

ニテリアンがドグマより，人格の向上を強く主張していた人々であるだけに，互いのコミュニケーションの拙さから，信頼すべき相手につまらぬ誤解や不信感を持ってしまったのは残念なことである。

さて，ナップは続いて，

「まず財政面から見ますと，理事会は素晴らしい資産を所有していますことを喜ぶべきかと思います。資産価値は絶えず上がっております。不動産が新しい条約を予期してここ東京で上がる割合を考えますと，最終的に売却する場合，どう見積もっても，協会は全体経費のかなりの部分を何年にもわたって賄えましょう。敷地は最も賢明に選定されました。建物は一般建築物に入り，細部の処理に関しては東京で最も立派な西洋館です。」

と述べ，惟一館の資産価値の高まった事を報告する。

次ぎにナップは，昔の同信の仲間に会わなかったが，来日早々福沢諭吉と金子堅太郎には会って親しく話をしたことを記す。まず，

「（ミッションの）事業のさまざまな部門に関する私の情報は専ら外部からのものです。事業そのものにはアプローチする接点がありません。ですから，私は事業に直接関わる日本人に自由に問い合わせることが出来ないのです。」

と言って，ミッションの人々に接触できないため，もっぱら外部の情報に頼らざるを得ない状況を記す。それから福沢に言及する。

「福沢氏は学校（引用者註：先進学院）が非常に高度なものであると話しています。私は彼とマコーリィ氏の関係が誠心誠意の関係であると思っています。」

と言う。この手紙で見る限り，“問題の所在”で既に触れたように，福沢とマコーリィの関係はこの頃までは良好であったことが分かる。それだけにマコーリィが11月に帰国した時，福沢が示した態度は，やはり唐突の感を免れない。だからマコーリィがアメリカに帰国している間に，日本で何かがあって，マコーリィに対する福沢の気持ちが変化したと考える他ないのである。

また福沢がユニテリアンの神学校，先進学院を高く評価していたことも，ナップのこの手紙から判る。この点に関しては後ほど詳しく論じたいので，今は金子への言及に移ろう。

ナップは，

「金子氏が言いますには，貴族や政府高官はもはやユニテリアン事業に注目しなくなっていますが，国民の中産階級に影響力を増してきているそうです。」

と記している。これまでユニテリアンを支援してきた貴族や政府高官が身を引くようになった背景には，教育勅語の発布後，内村鑑三の不敬事件でキリスト教一般に対する風当たりが強まったことがあるであろう。更に，日清戦争で天皇に対する忠誠心が高められ，ナショナリズムが強くなると，教育勅語に賛成し，日本の宗教や文化を認めるユニテリアン教でも，それがキリスト教の発展した形態である限り，政府内でこれをあからさまに支持することは憚るべきことであったのであろう。実はナップにこのように告げた金子自身が，既にユニテリアン支援に関心を失っていたのである。A.U.A 幹事バチェラーに宛てたマコーリィの 1895 年 2 月 14 日付けの手紙には，金子が世の風潮からマコーリィらユニテリアンを避けるようになり，そのことへの不満が書きたてられているからである。

金子は貴族や政府高官に代わって，中産階層，即ち特にキリスト教界や仏教界の知識人がユニテリアンを受け入れるようになったと言う。それはユニテリアンが日本の文化や宗教を認めたことが評価されたばかりでなく，一つに知識人のキリスト者が正統派の教義に飽き足らなくなり，進化論を受け入れ，ドグマよりも社会の現実問題にキリストの教えを応用する自由主義キリスト教に拠り所を求めるようになったからである。日清戦争後，資本主義が急速に成長を遂げ，大量の労働争議の発生を見るようになる。こうしたことから 1896 年以降，労働問題や社会問題を真剣に考える“キリスト教社会主義”に関心を持つ村井知至，岸本能武太，安部磯雄，小笠原誉至夫らが次々にユニテリアンになり，また当時社会問題になって

いた禁酒問題や廃娼問題で活躍していた島田三郎もユニテリアン・ミッションに加わる。

他方で，ほぼ同じ頃，仏教界からも平井金三や野口善四郎ら著名人がユニテリアンに加入する。

さて話をナップの手紙に戻すと，彼は続けて，機関誌『宗教』と先進学院の評判に触れる。そしてミッションを日本人に委ねるべきという進言を行う。またナップは控えめな表現を使っているが，マコーリィの評判に触れる。この頃日本人の間では，マコーリィに対する批判がだいぶ高かったようである。どうもマコーリィの非社交性は，前任者のナップが社交性豊かであっただけに，マイナス要因として受け留められ，日本人には評判が悪かったようである。

「今私の前にある『ジャパン・ウイークリィ・メイル』誌によると，日本で出版されている全ての宗教関係雑誌中，我々の機関誌が一番よく出来ているそうです。上で述べた二人ほど有名ではない何人もの人から証言があったのですが，先進学院の卒業生は数こそ少ないけれど，評判もよく，影響力も高いようです。私に情報を与えてくれる何人かの人は，幾つかの方面でもっと働きかけが出来ると感じています。もちろん今事態が事態だけに，日本人に管理や監督を任せたほうが安全という印象が強くなっています。しかしこの点に関し，最近の戦争で引き起こされた自給自足の感情がもっと認められてしかるべきでしょう。私が聞いたマコーリィ氏に関する唯一の批判は，彼がめったにユニテリアン主義のための集会で代表者として出席せず，その影響力を行使していないというものです。そうかもしれませんが，こうした批判は個人的に彼に怨恨を持つ人々から来ています。」

かくしてナップは，手紙の最後の方で，ミッションは日本において貴重で影響力ある仕事をしているのだから，事業を撤退すべきでないと言う。更にナップ一家は日本に戻って非常に幸せで，息子は慶應で教えることになったと伝えている[2]。

《ナップの第3の手紙》

ナップの第3の手紙は8月24日付のものである。それまでホテル住まい

をしていたためか，5月5日の手紙には住所が記されていなかったが，今回からローマ字で“麻布本村町183”と住所が記されるようになる。

まずこの手紙でナップは，5月5日に手紙を出してから特別に知らせなければならないことは何も無いがと断り，住む家を見つけられたこと，登山をしたこと，彼の著書『封建時代と近代の日本』（*Feudal and Modern Japan*）が『ジャパン・タイムズ』の社説で取り上げられたことを記した後で，なぜ自分が日本のユニテリアン・ミッションに近づくのを避けたか，その理由を述べる。

「全く偶然ですが，私がこちらに到着した時，時同じくしてマコーリィ氏が日本を出発されました。そのためでしょうか，私がユニテリアンの仕事を再びするために戻ったと考えられ，帝国全土から沢山の旧友の手紙や訪問をこれまで受けてきました。もちろん私はそうした印象を拭い去るため全力を尽くしました。望むらくは，その印象がマコーリィ氏の戻られる前に完全に無くなってくれればと思います。そのため私はユニテリアンの建物から極力距離を保ち，ユニテリアン関係者と関わりを持たないようにしてきました。しかし間接的ではありますが，新聞紙上で今現在激しくなっている新たなユニテリアン論争で，私の名前が取り上げられ，目立っています。私の著書で宣教師を扱った章は日本人の間で大変好評でした。そしてそれに伴い，正統派の宣教師仲間の怒りを引き起こしています。最良階層の日本人の間で広く読まれている『タイムズ』誌は私を弁護してくれ，この問題で10回近くも社説に取り上げてくれました。他方『メイル』誌も社説で『タイムズ』誌に続いてくれました。こうした事態は私が自分から求めたものではありませんが，後悔はしていません。といいますのも一般の宣教師運動とよりはっきりした違いを示すことで，ユニテリアンの主義に大いに貢献したと信ずるからです。私の後任者（引用者註：マコーリィ）がこれを喜んでくれるか分かりません。私たちが同僚であったとき，私たちは目的について一致していましたが，この目的に達する手段に関し全く意見を異にしました。私は日本で私たちの主義が他のものに増して必要としているものは絶えざる宣伝であり，日本人が新聞論争ほど面白く感じているものは無いと堅く信じております。私は日本人との手紙の遣り取りから十分このことが分かります。もしお差し支えなければ，理事会での印象など何かお教え頂けませんでしょうか。私は

『レジスター』誌の僅かな報告しか得られませんし，マコーリィ氏は私に全然手紙を下さいませんものですから。」

と述べ，手紙を終えている。

それにしても，筆者は上記の手紙を読んで疑問を感じざるを得ない。彼の所に手紙をくれたり，訪ねてきたりする人々には説明をしたとしても，果たしてどれだけナップは，肝心のユニテリアン・ミッションの人々に自分の立場を説明したのであろうか。ナップが日本に到着して，まず為すべき事は，旧知の神田佐一郎たちの所に行って，はっきりと自分の立場を説明する事ではなかったのか。そうするだけでも，ミッション内での混乱や戸惑いは避けられたのでないか。彼の書いた『封建時代と近代の日本』の評判が高くなればなるほど，マコーリィに不満を持つミッション外の日本人が，ユニテリアンの指導者としてのナップに一層期待してしまうのも当然のことであったろう。ミッションの人々と一緒になって，積極的な弁護をすれば，混乱もその分小さくなったことであろう。結果的に見ても，ミッションから離れて行動したのは，ナップの政策的な誤りであったことは明らかであろう。

しかしナップがいくら“仕方がなかった”と弁解しても，もともとナップのやり方に不満を抱くマコーリィがこうしたナップの評判を喜ぶはずがない。外交的な人間と外交が不得手な人間，この両者の感情的対立は，ユニテリアン・ミッションにとって実に不幸なことであったと言わざるを得ない。

尚，ナップの本は，日本がキリスト教化する可能性を否定したことで正統派の宣教師から批判を受け，またそれを弁護する『ジャパン・タイムズ』や『ジャパン・ウィークリィ・メイル』によって何度か取り上げられた[3]。しかしナップの主張は，日清戦争で勝利を得た日本人におもねる内容がなきにしもあらずであった。

少し後の話になるが，ナップは，1940年10月に『ジャパン・タイムズ』と合併することになる『ジャパン・アドヴァタイザー』誌を1901年（明

治34年）に譲り受け，社主となる。しかし財政不如意に陥り，1909年（明治42年）B・W・フライシャーに同誌を譲り渡さなければならなくなったという[4]。息子のアーサーを1906年に亡くした上に，こうした経済的失敗で，その後間もなく1910年正月に彼はアメリカに帰ることになる。それ以降日本を再び訪れることなく，1921年に亡くなった。

《ナップの第4の手紙》

ナップの最後の手紙は10月1日付で，7ページにわたる比較的長文のものである。ここには大変重要な情報が幾つか記されているので，労をいとわず全文を邦訳して紹介する。

まず前文を掲げる。ここでは，ナップの福沢礼賛と，福沢がマコーリィに対しては決して見せなかった信頼と期待をナップに示したことが記されている。

「親愛なるバチェラー様

ここで最近起こった興味深い出来事をご報告申し上げます。恐らくこれは日本に自由思想を導入する問題を解く間接的な手掛かりとなるでしょう。

私が日本に戻って以来，福沢氏は私を以前よりも一層信頼し，敬意を表して下さいまして，日本人は今私のことを第二のドクトル・シモンズと言っております。シモンズ医師は亡くなるまで30年間福沢氏の最も親しい友人であり，信頼された相談役でした。勿論私はこのことを身に余る最大の光栄と考えざるを得ません。なぜなら最近福沢という名前は大衆の中で力と影響力を増してきており，名声は天皇に次ぐ程です。他方で思想面と道徳面では遥かに卓越した重みを持っています。」

この後，これまで知られることがなかったナップと福沢の慶應義塾に関する重大な話し合いの内容が記される。

「彼は最近彼の大学と学校の組織変更を考えています。それでその事に関し私の助けを求めました。私は彼との5時間にわたる懇談から今戻ったばかりです。その懇談で私は彼の賛同を得られるようにとかなり大胆な計画を提示しました。しかし大変驚いたことに，彼は私の案に心から賛成してくれたのです。そして殆どそのまま採用するというのです。中でも再来年の開国を見据えて慶應義塾はアメリカの同じような大学と密接な提携を結び，国際的

な性格を負うようになるでしょう。恐らく大学の規約が変えられ，私と私が指名する他のアメリカ人が監督者会（the Board of Overseers）で任命されるようになるでしょう。

勿論そのような機会は直接的であれ，間接的であれ，何か特別な利益を得るために用いられるべきではありませんが，数年すれば，発展の自然な過程で必然的に日本における自由思想の成長を促すものにつながることは明らかでしょう。」

こうした話はこれまで殆ど全くといっていいほど，慶應義塾の関係者にも知られていなかったものである。ナップの案は大変な計画であった。明治32年（1899年）の条約改正で第二の開国となる内地雑居が実施される。日本人が欧米諸国の人々と平等に交際し，商売も出来るようになる。従って慶應義塾の学生が英語で充分対応できるようになるため，アメリカのハーヴァードのような大学と提携を結んだらどうか，というのがナップの提案であった。福沢がその計画を「殆どそのまま採用する」と言ったという。このナップの大胆で斬新な計画に膝を打って賛同する福沢の姿が目に浮かぶようである。この手紙でナップが提案し，福沢がほぼ承認した慶應の組織変更計画が，もし実現していたら，慶應も今とはだいぶ異なる大学になっていたに違いない。19世紀末にアメリカの大学と提携を結び，互いに人材を自由に交流できていれば，慶應は最も国際的な日本の大学になっていたことであろう。慶應だけの問題ではない。大きく日本という国家を考えたとしても，影響は多大であったろう。19世紀末に日本の大学が，ハーヴァードのようなアメリカの大学と提携を結んでいたら，日本の国際化に役立ったばかりでなく，多くの国際人を輩出して，彼らが外交面で活躍していれば，ひょっとして日本の進路も変えられていたかもしれないからである。

この計画は決して荒唐無稽ではなかった。何事にも慎重な福沢である。実現できない案に飛びつくはずがない。この案は，福沢からすれば，大いに実現可能なものであった。なぜならナップには既に実績があったからで

ある。1889年にナップの仲介により，ハーヴァード大学総長，チャールズ・W・エリオットからの推薦で慶應は三人の教授，即ち理財学のドロッパーズ，法学のウィグモア，文学のリスカムを迎えることが出来た。そういう実績があったので，ナップの案は福沢にとって現実味のあるものであった。今度もナップがA.U.A.やハーヴァード大学の間に立ってくれる。福沢の期待はいやがうえにも膨らむばかりであったろう。この時の福沢の頭には，間近な将来に実現する自分の学校の輝かしい姿が去来し，喜びを隠せなかったに違いない。老年の福沢が5時間もぶっ通しで話に夢中になったのである。その興奮した様子が伝わってくるようではないか。冷静な彼が，十分とはいえない英会話力で5時間も話に夢中になるということは，滅多にない珍しい出来事であったろう。それは，いかにナップの計画が福沢の心を捉え，喜ばせたかを如実に物語っている。福沢はナップと共に何とかしてこの計画を実現させたいと思い，アメリカのユニテリアンに強い期待を懸けたに違いない。

ところで手紙では，この後ナップは話題を変え，先進学院に対する福沢の考えを記す。

「しかしバチェラー様は，福沢氏がマコーリィ氏のここ日本における働きをどう評価しているか，お知りになりたいに違いありません。会談の途中で先進学院のことが話題になりました。福沢氏が言われるには，ご自身は先進学院の働きと日本における他の全ての神学校とは，重要，且つ根本的な違いがあることを十分認めておられるとのことです。福沢氏が今望んでおられることは，ただ道徳改革の大きな仕事において先進学院が積極的に先頭に立ってほしい事だけだ，と言われました。もし先進学院がその仕事をしてさえくれるならば，自分は喜んで，また熱意を持って自分の影響力の全てをかけて支援し，協力しようとの事でした。福沢氏の言われたことから考えてみますに，福沢氏はマコーリィが煩わしい事柄から遠ざかるのはよいが，自分の原理にもっと積極的であって欲しいと考えておられるようです。また知的教育的な観点からして，それほど遠くない日に先進学院と慶應義塾が合併する時が来るように思いました。」

この個所もいろいろな点で重要である。まず筆者が驚くことは福沢の先進学院への思い入れの強さである。この点について少しばかり検討してみたい。

先進学院は，実は既に1895年頃，A.U.A.本部から閉鎖の話が出ていて，存続が危ぶまれていた。当然ながら，監督者のマコーリィ，教師のドロッパーズを始め，卒業生の杉村縦横も含めて，日本ユニテリアン・ミッション挙げて神学校存続の嘆願書を出していた。福沢も支援者の一人として嘆願に名前を連ねていた。この一太郎英訳による福沢の手紙は少し長くなるが，これまで知られていなかったものと思うので，拙訳にて紹介をしたい。

「　　1895年10月25日

アメリカ・ユニテリアン協会幹事，ジョージ・バチェラー様

1895年8月23日付のお手紙頂戴いたしました。そのお返事として，以下の事を述べさせていただきます。

(1) お話に出ておりますボストンにある貴機関，アメリカ・ユニテリアン協会は“今活動されておるままで”日本の国民にとっては十分価値あるものです。思いますに，今現在ここでなされておるユニテリアン協会の方式を変える必要がないばかりか，唯一の正しい道は益々この方式を発展させることにあります。日本の現在の道徳理論と実践を完全なものにする必要があることは確かと存じます。従ってキリスト教は他の宗教と全く同様に歓迎されます。特にユニテリアン教はそうです。何故ならば，私の理解が正しければ，(a)キリスト教から発展したものとはいえ，ユニテリアン教は科学的な原理に基づき，自由探求により導かれ，(b)神学的偏狭さから自由だからです。これら二つの特徴は特に日本の教育ある階層に魅力的です。

(2) 日本にはこれまで一般の教育機関に対してすら財政的支援を行う習慣がありませんでした。ましてや神学校ではそうです。ですから日本人はまずこの習慣になれねばなりません。そして“ゆくゆく私たち“自身の市民”の手で財政的支援の見込みが立つ”ようにしなければなりません。これは時間の経過を意味します。

(3) お答えは上記のことで明らかです。即ちお時間を下さいということです。

(4) 貴機関（引用者註：先進学院）がもっと実践的で，有用である方法に関

してですが，私はマコーリィ氏とお話をしてまいりました。マコーリィ氏からそちらに報告があると思います。（引用者註：マコーリィのバチェラー宛1896年9月14日付手紙によると，福沢は慶應義塾のユニヴァーシティ・エクステンションとして神学校を続ける事を提案したようである。）

敬具

福沢諭吉

息子，一太郎に託して[5]」

この手紙には福沢の宗教観が如実に示されている。福沢は『福翁自伝』（1898年）の末尾に，

「私の生涯の中に出来(でか)して見たいと思ふ所は，全国男女の気品を次第々々に高尚に導いて真実文明の名に愧かしくないやうにする事と，佛法にても耶蘇教にても孰れにても宜しい，之を引立てて多数の民心を和らげるやうにする事と，大に金を投じて有形無形高尚なる学理を研究させるやうにする事と，凡そ此三ヶ条です。」[6]

と述べているが，まさに上記の手紙の主旨と一致する。つまり福沢は道徳の向上と，仏教，キリスト教いずれであれ，宗教によって人々が心の平安を得ること，そして学問研究を発展させることを彼の思想の根本に置いたのである。

福沢の宗教観の到達点は，ユニテリアンが求めていた“普遍宗教”（universal religion）と同じものであった。福沢の生家が浄土真宗本願寺派に属し，福沢自身も迷信呪術を否定する浄土真宗に理解と共感を持っていたことはよく知られている[7]。しかし明治30年（1897年）7月に出版された『福翁百話』の“政論”（九十四）には，

「真宗の本尊を拝むに木像よりも画像を可とし，画像よりも名号貴むの説あり。金箔を附けたる木像を安置して佛徳を表するが如きは，単に俗眼を惹くの方便のみ。佛教の本意に非ざるが故に，止むことなくんば，一歩を進めて画像にするこそ淡白なれ。画像も尚ほ形を存して面白からざるが故に，寧ろ南無阿弥陀佛の六字のみにすれば更らに美なりとの意味にして，真実を云

へば此六字の名号も無用なり。念佛もなく，寺もなく，仏壇もなく，坊主もなく，経文もなく，一切虚無の間に佛徳の存するものある可し。我輩の至極感服する所にして，此辺に心を安んずるは安心の高きものなりと思へども，唯独り自ら思ふのみ。」[8]

とあり，そこには浄土真宗的なあり方をも超えていこうとする姿勢が見られる[9]。実はこれまで指摘されたことがないと思うが，福沢のこの考えはユニテリアンの“普遍宗教”の到達点を示しているのである。

福沢がユニテリアンに惹かれた点は，彼が上記の手紙(1)の(a)，(b)で示す通りである。もう一つ福沢のこの手紙で暗示はされているものの，明言されていない点がある。それは比較宗教学への関心である。この手紙では，

「今現在ここでなされておるユニテリアン協会の方式を変える必要がないばかりか，唯一の正しい道は益々この方式を発展させることにあります。」

とある。この当時のユニテリアン・ミッションの主な働きは神学校と雑誌運営そして日曜演説であったが，福沢はこの現状を更に発展させることを強調していることになる。しかも福沢が強調しているのは，ユニテリアンの神学校であった。更にナップの10月1日の手紙を見るとはっきりする。福沢は，先進学院は他の神学校とは全く違うタイプの神学校であると認識していた。ナップはそう記している。筆者は福沢が先進学院でなされる教育そのものに強く惹かれていたと考える。つまり通常の神学校では，特定の宗派や特定の宗教の教理が主として教えられる。ところが先進学院では，キリスト教も仏教や儒教，神道と同じく客観的，学問的に教えられる。その教育の目指すところは，諸宗教の比較を通じて，諸宗教に共通する普遍的なもの，所謂“普遍宗教”を探求することであった。

実は福沢の比較宗教研究への関心は，ユニテリアンと関わる以前から強くあったのである。彼は明治17年頃，英国国教会の宣教師であったウォルター・デニングがキリスト教と仏教の優劣論を始めた時，「宗教の主義はつまるところ同一旨に帰着するやうに思はれる。議論をする前に両者の

趣旨を比較研究する必要があらう。」と言ったという[10]。この一件だけでも，福沢が宗教の比較に関心を持っていたことを示す十分な証拠となろう。

従って筆者は，福沢の『福翁百話』に見られる究極の境地は，儀式や念仏など諸宗教の特殊性や相違を示すものを全て取っ払って，尚そこに残る“根底的なあるもの”を述べたものと考える。繰り返すが，これはユニテリアン主義の一つの到達点である。福沢は「宗教の主義はつまるところ同一旨に帰着する」ので，諸宗教，諸宗派の違いや争いを超えて，人々が究極的な同一趣旨を互いに認め合う日の来ることを常に願っていたのであろう。因みに，ユニテリアンの“自由神学校”が“先進学院”と改名された時，その名付け親となったのが福沢であった[11]。この“先進”という文字の中にユニテリアンに対する福沢の期待を見ることが出来よう。

福沢はかつて「道徳的な力としてのユニテリアン主義を歓迎するので，慶應の学生が全てユニテリアン教徒になってもかまわない」とマコーリィに言ったことがあった[12]。しかし残念ながら，福沢の宗教的境地は，ユニテリアンが宗教として日本に根付かなかったのと同じく，あまりに知的で，一般人には抽象的過ぎて受け入れられなかったようだ。その何よりの証拠が，彼の後に続く者がいなかったことである。

さて筆者がここでもう一つ指摘したいことは，福沢がなぜ先進学院における道徳教育に拘ったかである。福沢のマコーリィ批判もこれに関係していると思われるし，ユニテリアンを支援した金子堅太郎との違いを明確にする上でも重要であるので，少し紙面を割いてこの点を論じてみたい。

政府要人であった森有礼，吉田清成，金子堅太郎，佐野常民らがユニテリアンに強い関心を抱いたのは，やはりユニテリアン主義が日本国民の道徳改革に寄与すると考えたからであった[13]。ところが道徳改革として政府が教育勅語を1890年（明治23年）に発布すると，前二者の森と吉田はそれぞれ1889年（明治22年），1891年（明治24年）に亡くなったが，他のユニテリアン支持者であった人々は，道徳改革でことさらユニテリアンを

支援する必要性を感じなくなっていったようだ。教育勅語で十分という意識が強まったのであろう。

教育勅語のほぼ実質的な執筆者とされる井上毅は，歴史学者の大久保利謙氏によると，「福沢恐怖症という病気にかかっている患者だった」[14]という。その井上は，大変興味深いことに，『大日本帝国憲法』，『皇室典範』，『教育勅語』のそれぞれの草案を執筆する際，福沢の『文明論之概略』，『帝室論』，『尊王論』，『学問のすすめ』などを意識し，それらへの対抗に動機付けられていた可能性が高い，と教育社会学者副田義也氏は言う[15]。副田氏は『文明論之概略』と『教育勅語』を丁寧に比較し，福沢が天皇制を英国の王室と変らないものとし，国体＝国民の独立を説いたのに対し，井上は天皇制を日本独自のものとし，国体を天皇の君徳と臣民の忠孝が行われる場とし，国家の官僚として国民を統治するため，福沢の国体概念の三元論的構成（即ち，国体，政統，血統を区別する三元論），普遍的性格，国民の政治的独立の重視を，一元論的構成，特殊的性格，君徳と忠孝の重視に変容させた，と論じる[16]。

また副田氏によると，教育勅語の英訳に参加した新渡戸稲造は，教育勅語が日本の民族文化に属する日常規範を包括したものとして評価しつつ，それとは区別される民主主義やインターナショナリズムに属する道徳規範を欠いていると見ていた[17]。新渡戸が政府内にありながらも，こうした視点を持ち得たのは，彼がクエーカー派キリスト者としての信仰を持っていたことと無関係ではないであろう。

これに対し，ユニテリアンを支援していたはずの金子堅太郎は，新渡戸の様に教育勅語の問題点を見る眼識がなかった様に思われる。彼の考えは，明治天皇の記念館で教育勅語に関して講話したものを文書化した『教育勅語の由来と海外に於ける感化』（1936年）において明らかと思う。その中で金子は，教育勅語の由来を語り，海外の評判を気にした井上毅から，教育勅語の中の「中外ニ施シテ悖ラス」という文言が適当かどうか問われた事に言及する。この問いに対し，金子は「この教育勅語は中外に施して悖ら

ぬと思ふからあつても差支へないと思ふ」と答えたという。つまり金子は，教育勅語は世界に示しても何ら問題はないと確信しているのである。

更に海外における感化として，金子は次ぎのような例を挙げる。即ち彼がアメリカ人に日露戦争に勝った原因は忠君愛国の精神を教える教育勅語にあると語った後，自分が予め用意した英訳を列席の男女に見せたところ，彼らが感激賞賛したという。そしてこうしたことがあったので，彼は帰国後，教育勅語の翻訳を政府に進言した。すると菊池大麗，末松顕澄，新渡戸稲造，神田乃武，金子の5人が選ばれ，彼らで英訳したところ，その訳が海外で評判が良いと語り，最後に「この教育勅語さへ守つておれば治安維持法で括られる大学教授もない。この在難い教育勅語を戴いて日本国民は世界に独歩の地位を持つておる」と述べ，教育勅語さえ守れば国は安泰であると強調して話を終える[18]。端無くも，ここには“国民は黙ってついて来い”という金子の愚民観が露呈されている。

講話であるから当然であろうが，金子の話はあまりに良いこと尽くめである。しかしよく検討してみると，彼の話にはかなり杜撰なところがあるし，教育勅語の英訳にしても，歴史家のサンソムに言わせれば，「おそるべき文体」なのである[19]。

以上のことから分かるのは，金子のユニテリアン支援が単なる政策的なものに過ぎず，何ら主体的なものでなかったということである。

ところが同じくユニテリアンを支援した福沢は，そうした日本人にしか通用しない道徳に批判的であった。彼は国の壁を突き抜けた人間共通の道徳を大事にした。福沢の言う“道徳”とは，先進学院で教えられる様に，他者の信仰や信念に対し寛容であること，ドグマから自由で，常に科学的な討究を大事にして真理を求めること，これに尽きる。教育勅語はこれら全てに反し，良心の自由を認めず，政府が決めた政策をひたすら国民に従わせるために用いられるもので，福沢が賛同するはずがないものであった。明治期権力を握った人々は，自ら過ち多き人間であるにも拘わらず，自分たちが誤るはずがないという信念に立ち，被支配者に疑問や反対意見を持

つことを許さなかった。彼らが服従を旨とする忠孝を絶対視したのも当然である。

しかし忠誠心が道徳の中心に置かれると，普遍的な正義や論理性，公平さが無視される危険が生じる。また忠誠心や服従が強調されると，忠誠の名目で威勢のよい非合理な言辞が大手を振い，常識的な疑問が弾圧される。更には，人道に反することさえ行うことが忠誠心の証と見なされ，狂信を生む。

忠孝や服従が道徳の中心になり得ない点は，先進学院で倫理学と哲学史の教授をしていた大西祝が，井上哲次郎の『勅語衍義』（明治24年）を念頭において明確にしている。大西は，忠孝が道徳の基本にならない根拠を次ぎの様に示す。忠孝が君父の命令に従うことを意味するなら，彼らの命令以外のことは道徳にならなくなる。また忠孝が道徳の基本なら，全ての徳行は忠孝に帰せられてしまうことになる。また，忠と孝が対立した場合，どちらを優先するのか。更に，君父の命令が道徳なら，その命令が正しいのか，間違っているのか，問うことすら出来なくなる。従って服従は道徳の基本になり得ない，と[20]。

こうした点で，国民一人一人が自ら考えることを重んじた福沢は，大西と同じ考えに立ち，金子や井上哲次郎と真っ向から対立する。敢えて権力を求めず，在野に留まり，生涯民間の言論人，教育者に徹した福沢が，自らの行動原理として市民一人一人の判断を大切にする民主主義の原理を受け入れ，容易に政権交代が可能であるイギリスの議院内閣制を主張したことはよく知られている。

その福沢が『時事新報』に書いた論評が，『ゆにてりあん』第2号に“福沢諭吉氏会て故森文部大臣の倫理教科書を評す”と題されて掲載されたことがあった[21]。ここに典型的な福沢の考えが示されているので，紹介したい。（これは『文明論之概略』の中で述べられている“私徳から公徳へ”の考えと同じである[22]。）

そこで福沢は「人間の徳行を公私の二様に区別して，戸外公徳の本源を

家内の私徳に求め，又その私徳の発生は，夫婦の倫理に原因するを信ずる者なり」と述べ，そもそも政府が道徳を押し付けるのはおかしいと論じた。彼は「今倫理教科書は，文部省撰とあり，省中何人の手に成りしや，其人は果して完全公徳の人物にして私徳公徳に欠くる所なく，以て天下衆人の尊信を博するに足る可きや，諭吉に於ては文部省中に斯る人物ある可きを信ぜざる」と言って，自ら実践できていない道徳を国民に守れと教える愚かしさを批判した。彼は“お上”に唯々諾々の人間ではなく，一人ひとりが自分で判断して，行動することを大切にした。上から押し付けられる道徳では，主体性が育たない。ましてや教育勅語に見られる“臣民”教育からでは，独立自尊の“市民”の形成は期待出来るはずもない。

以上のことを考えても，福沢が教育勅語に賛成していなかったことは明らかであろう。事実，福沢の四男大四郎氏が「本塾にも幼稚舎にも教育勅語というものはなかった。本塾の人々は他の小学校で勅語を見たり，聞いたりしたろうが，幼稚舎の生徒は全然知らなかった。君が代を歌うこともなかった。」[23]と証言している事からも分かる。

福沢の愛国心はインターナショナリズムに反するものではなかった。自己相対化がなされた彼の天皇観は，排他的，絶対的なものではなかった。天皇を政治から外し，国民の感情と伝統の領域に限定する福沢の考えは，現在の憲法に示される“象徴としての天皇”に近いものであるといわれる[24]。

その福沢が，10月1日のナップの手紙によると，

> 「ただ道徳改革の大きな仕事において先進学院が積極的に先頭に立ってほしい事だけだ，と言われました。もし先進学院がその仕事をしてさえくれるならば，自分は喜んで，また熱意を持って自分の影響力の全てをかけて支援し，協力しようとの事でした。」

というのである。マコーリィに対する福沢の不満は，ユニテリアンの大事な“道徳改革”という年来の主張を十分発揮していないことにあった。マコーリィの道徳改革の主張は，教育勅語が出されることでトーンダウンしたことは確かである。彼が教育勅語に全面的に賛意を示したことはユニテ

リアンの機関誌『宗教』を見れば明らかである[25]。教育勅語が上からの道徳の押し付けであるという視点が，ミッションのメンバーではなかった大西祝は別として，この頃のユニテリアンにはあまり見えていなかったようだ。日本のユニテリアンは皆，どうもマコーリィ同様，相対主義を強調するあまり，日本の特殊な天皇制を無批判に受け入れてしまったようだ。批判力をなくした相対主義は，自己絶対化から自由になれない。科学的自由討究によって自他の考えを省みて，おかしいものをおかしいと言えなくなったユニテリアン主義は単なる迎合主義にすぎない。ユニテリアンは相対的なものを絶対化した教育勅語を殆ど批判しなかった。ナップも，彼の『封建時代と近代の日本』を見る限り，この点に関しては同罪であった様に思われる。

教育勅語が国中で道徳教育の規範として力を発揮している最中に，福澤は敢えてこれに対抗したものと筆者は考える。彼は今まで以上に，下からの道徳改革の推進役を担う機関として先進学院が先頭に立つことを期待したのである。「先進学院が道徳改革の仕事に専心してくれるなら，私も力の限り応援する」といった福沢の言葉は，そうした理解に立たない限り，説明がつかないであろう。福沢も金子も共に，ユニテリアンを当初より支援して来た。しかし両者の精神は全く方向を異にしていたのである。ユニテリアン自身が彼ら本来の“道徳のあり方”を福沢から学び直すべきであったと思う。

なぜ福沢はこれほどまでに先進学院に関心を持ったのか。それは自分の到達した信念を一番よく推進し，実現していると福沢が考えたからである。これは筆者の福沢理解の核心となる部分である。だからこそナップが手紙の同じパラグラフの終わりに，

> 「また知的教育的な観点からして，それほど遠くない日に先進学院と慶應義塾が合併する時が来るように思いました。」

と記しているように，福沢は先進学院と慶應義塾の合併すら考えたのである。ナップの英語の表現は，“merging our institution in his at no very distant

day”である。これは直訳すれば，「それほど遠くない日に先進学院を慶應に吸収してしまう」となる。ユニテリアンに対する福沢の思い入れは，彼をしてこう言わしめるほどまでに深いものであったのだ。こうした事は一般に知られていないだけに，筆者としてはこの事実を重く受け止めたい。彼の思想の根底には，ユニテリアン的な宗教思想が強くあったのである。

ところで，この先進学院と慶應との関係に関しては，日本人の側にも証言が残っている。それは当時慶應でドイツ語を教えていたユニテリアン教徒の教授，向軍治の証言である。彼は『慶應義塾基督教青年会三十年史』の“追懐”の冒頭で，

> 「世間では福沢先生は宗教の事に関しては不関焉の方だと誤解して居るが，先生は決して非宗教的な方ではない。先生の御考へは慶應を総合大学にして，経法文等の他に神学部を置かうとされた。その神学部にはユニテリアンを充て，芝園橋の唯一館をユニバーシチー・エキステンションとなす意思を持って居られた。」[26]

と，驚くべきことを記している。これまで向軍治の話しか残っていなかったので，福沢が慶應義塾に神学部を設置しようと考えていたということが，どの程度信憑性があるのか訝しむ向きもあった。しかしナップの手紙で向の話に信憑性が出てきたといえよう。福沢のユニテリアン支持は中途半端なものでなかったのだ。しかもこの話を向が福沢より聞いた期日も1897年10月頃と特定することすら出来るのである。ユニヴァーシティ・エキステンションの話はマコーリィとの間にも出ていたが，神学部を設置するといった話は，後にも先にも福沢がナップと話あった時だけであろう。恐らく福沢はナップの計画を聞いた後，ハーヴァード大学の神学部に対応するものを考えて，それを向にも話したのでないだろうか。

さてナップの第4の手紙は，ここまでは全て順調に進んで来たが，次ぎからナップは，計画実現のネックになる部分に触れていく。つまりマコーリィの存在である。彼を抜きにしては何も出来ない，一歩も前進すらできない現実があったからである。

「私はこうした事柄において，マコーリィ氏の留守中に，彼の領分を侵しているかもしれないことを重々承知致しております。しかし会談は私が求めたものではありませんし，こうした話は会談の中で自然に出て来たものです。そして私はその結果について自分の印象をお伝えしているだけです。

また私が恐れますことは，マコーリィがこれを知ったとき，全ての事柄に不満を持つのでないかということです。しかし仕方がありません。私が思うに，上記のことは私のここにおける純粋に独立した立場から生ずる結果なのです。こうしたことは日本におけるいかなる宣教団体も為し得なかったことであろうと思います。

日本における私の以前の同僚との関係ですが，既にお話しました理由で摩擦がやむなく起こるのでないかと心配しています。非常に不幸なことに，私がマコーリィに地位を譲って以来，彼は私が自分の生涯で最も重要な業績とみなす事業で私が果たす役割にこれまで全く関心を払ってきませんでした。彼は私に事業の詳細も結果も何も知らせてきておりません。政策上の面もありますが，摩擦を避けたいという思いから，私の独立した立場を生かすために，彼の現在の仕事に一切関わりを持たないようにしています。そうすれば，彼がこれまで取って来た態度をそのまま維持できるからです。しかし私は自分だけで出来る方法で，最大限事業に役立ちたいと思っています。

出来るだけ価値のある情報と結果を絶えずお知らせしたく思いますが，勿論一情報提供者の立場に満足はしません。ですから偶々事業に対する批判や結果についての不利な評価を故国に送るような場合は，マコーリィが同じ手紙でそれらの批判や評価に対して自分の意見を述べられるよう，まずマコーリィにそれらを見せることにします。しかし私はそんなことが起こらないことを信じています。そしてまた摩擦が起こるかもしれないというのも，私の全くの杞憂なのかもしれません。

私たち家族は日本での新しい生活を満喫しています。息子は慶應の仕事の他に，今『ジャパン・タイムズ』誌の編集スタッフに加わっています[27]。一方私は『時事新報』の編集長補佐のような仕事をしています。

この手紙をお目通し頂ければ幸いです。ジョージにもよろしくとお伝え下さい。

敬具

アーサー・メイ・ナップ」

ナップの手紙を受け取ったバチェラーやA.U.A.の理事会も，ナップと同じ懸念を持ったことであろう。問題は，日本ユニテリアン・ミッションの責任者であり，監督者であるマコーリィ抜きで話が進んでしまったことである。ナップはユニテリアンの組織を代表する公式な人間ではない。組織から離れ，単なるアメリカから再渡来した一私人に過ぎない。ユニテリアンの組織が動くには，何事であれ，公式の代表者マコーリィを通さなければならない。A.U.A.とて，この計画がマコーリィを通してやってきたのであれば，大いに検討もし，積極的に推進もしたことであろう。ところがマコーリィの留守中に，ナップが動いてしまえば，マコーリィの立場がなくなる。マコーリィのほうでも，もしこの計画を知らされれば，なぜ福沢が自分にでなく，ナップにこうした重大な話を持ち込んだのか，と福沢に不満を持ったに違いない。いずれにせよ，よくよく考えてみれば，実はマコーリィを抜きにしたこのナップの計画は，もともと実現する見込みのないものであったのだ。

大変残念なことに，筆者はナップの計画に対するA.U.A.からの回答をハーヴァードで発見することが出来なかった。筆者が唯一発見できたものは，A.U.A.幹事バチェラーからナップ宛に10月15日に送られた手紙の写しのみであった。これはどうもナップの第2と第3の手紙に対する遅くなった返事である。そこでは次ぎの様に語られている。

> 「あなたからの2通の手紙を受け取りましたが，様々な事柄に振り回されたためと特別に何も言うことがありませんでしたので，お返事は出しませんでした。この手紙を受け取る前に，あなたはマコーリィに会って彼から報告を受けていることでしょう。彼がこちらを訪問している間，大変な人気で，前以上に彼が仕事に自信を持ったことは疑いありません。なんとしてもといった感じがマコーリィにあったのでしょう。A.U.A.もしくは女性同盟の援助によって事業は引き続き支援を受けることになったようです。」

以上のように，バチェラーはマコーリィが日本のユニテリアン・ミッション存続の訴えを成功裡におさめたことを報告した後，距離が遠いため，ナ

ップの著作が引き起こした論争が事業の助けになるのかどうかわからないと語り，自分にとってはやはり日本は遠い国，と言って手紙を閉じている。

ナップの慶應義塾に対する提案をA.U.A.がどう受け留めたかを明示する文書はないが，しかし文書の有無はさほど問題ではない。なぜなら結果的に彼の計画が実現されなかったという事実があるからである。ナップの案は拒否されたのである。

これは筆者の推定に過ぎないが，A.U.A.はナップからの手紙を受け，ナップと福沢の計画に魅力を感じながらも，結局仲間同士の分裂を避けるために，この案にのらないことに決定したのでないだろうか。当時日米間で手紙が届く日数は25日ほどであったから，恐らく11月半ば過ぎにナップにA.U.A.からの回答が届き，ナップからその旨が直接福沢に伝えられたに違いない。

ナップとマコーリィの仲が良好であれば，ナップの計画は実現し，慶應義塾という心強い援軍を得て，ユニテリアン協会は更なる発展をなし得たであろう。指導者同士の仲違いの故に，ユニテリアン自らそのチャンスを逸したのである。従って先進学院が慶應義塾に合併されることも，慶應義塾に神学部が創設されることもなくなった。

ナップを通じてA.U.A.の答えを知らされた時の，福沢の落胆振りはいかばかりであったろうか。我々は彼の失望の大きかったことを十分推測できるであろう。

かくして，なぜマコーリィが11月末に日本に戻ってきた時，福沢が彼に冷たい態度を取ったのか納得できよう。ナップも申し訳なさで福沢に会わせる顔がなかったであろう。何の根回しもせず，自分がもはや監督者でないのに，今も監督者であるかのように福沢と話してしまったナップの責任は大きい。ナップの軽率な言動に対する最大の被害者は福沢であった。ナップは福沢の信頼を，結果的に裏切ったのである。親友として信じていたナップの裏切りは，年を取った福沢にとって，あまりに過酷過ぎたので

ないだろうか。

ナップもA.U.A.にもこれを機にして手紙を送らなくなり，ミッションからも，福沢からも遠ざかった。

福沢の“大きな夢”は一，二ヶ月で潰えた。福沢の失意はいかばかりであったろうか。福沢が二度と再びユニテリアンと関わりを持とうとしなくなったのも，これで痛いほど判る。但し，福沢は誰にもこのことを漏らさなかったようだ。この件に関する福沢の沈黙は，彼自身が受けたショックの大きさを物語るものであろう。勿論，詮方ないことを愚痴ることは，福沢の性格に似つかわしくなかったであろうが。

しかし口には出さなかった悔しさと落胆が福沢の老体に相当こたえたに違いない。受けたショックが大きいと，一日で髪が白くなってしまうことはよく知られているが，命さえ縮ませることもある。福沢が脳溢血で倒れるのは，この時から1年も経たない明治31年9月26日である。福沢は，ナップの案によって，いわば“天に昇ったような高揚感を味わった後，急に奈落の底に突き落とされる”経験をした訳である。そんな急激な落差が，福沢の脳溢血に無関係であったとは，筆者には到底思えない。

さて福沢は最初の脳溢血の後一時期回復するが，34年1月25日病を再発させ，2月3日にこの世を去った。そして8日に行われた福沢の葬儀の出席者名簿には，ルイ・ブリデルやグリーンの名はあるが，ナップの名は載っていなかった[28]。あれほど親しかったナップも出席できなかったのだ。それほど“第二のドクトル・シモンズ”と言われたナップにとっても傷が深かったのである。

なお因みに，明治31年（1898年）9月病に倒れた福沢は，「修身要領」を明治32年11月門下の高弟たちに編纂させた。翌年発表されたこの「修身要領」の基本は“独立自尊”であって，この精神は基本的に啓蒙主義の申し子であるユニテリアン主義に繋がるものであった。従って「修身要領」が発表されると，反対意見の急先鋒に立ったのが井上哲次郎であったのも不思議ではない。井上の反対の根拠は，「修身要領」には不変を謳う「教育

勅語」と反対に，徳教の進歩が主張されていることと，忠孝の教えが無視されているというものであった。「修身要領」は「教育勅語」のいわばアンチテーゼとなっていたのである[29]。

同時に我々は「修身要領」に，福沢が以前から主張していた“宗教”や“宗教の比較研究”に対する言及がなくなっている事に気付かされる。この脱落には，福沢のユニテリアンへの失望が反映されていると見て差し支えないであろう。又，その失望は従来の彼の主張を変更させる程大きかったとも言えるだろう。

最後に一言，福沢の長男一太郎のことを記してこの論を閉じたい。福沢がユニテリアンから離れてしまったことで，一番困ったのは長男の一太郎であったように思われる。一太郎はアメリカでナップと知り合って以来，宗教ではユニテリアンに最も共感を持っていたと思われる。ナップが1889年5月に一時帰国する際，日本人の支援者に送った邦文の手紙に，不在中の教義書等の要望があるときの照会先として挙げたのは，一太郎の名前であった。また誰よりも尊敬する父親諭吉がユニテリアンを支援するのを見てきたのである。そしてその父から，先に見たように，A.U.A.への手紙の翻訳を頼まれた際，先進学院を慶應義塾のユニヴァーシティ・エクステンションにするという話を聞いていたはずである。それに向軍治が神学部設置の話を福沢から聞いているのに，長男の一太郎がそうした話を知らないはずがない。福沢はナップの話をかなりの部分一太郎にだけは話をしていた可能性が高い。ひょっとすると，ナップとの話し合いでは，父親の通訳として同席していたかもしれないのだ。だから福沢がナップから裏切られたとき，父親同様，一太郎もショックを受けたことであろう。恐らく父諭吉からこの事件を口外することを堅く禁じられたことであろう。いずれにせよ，息子の彼が，父親が裏切られるまで，ユニテリアンに共感を持っていたことは確かであろう。しかしその父親がユニテリアンと関係を絶ってしまった時，一太郎は戸惑い，以後，父親の前でユニテリアンの名前を口に出来なくなったと思われる。その結果，彼は最後の最後まで宗教的に帰

属できるものを持てないままであったようだ。彼の妹，志立タキ氏談によれば，一太郎は「キリスト教をひそかに信じていながらそれをとうてい言い出すことが出来ないような福沢家の家庭的雰囲気」のため，自分の心を打ち明けられなかったという。あれほどリベラルであった福沢の家で，キリスト教徒であることを言い出せないという奇妙な雰囲気も，ナップとのいきさつを考えれば，十分納得できよう。そして「彼の死後暫くして発見された妹タキ氏にあてたらしい遺言の中には，葬式をキリスト教でしてほしいという旨がひそかにしたためてあったと云う。」[30] 恐らくそのキリスト教とは，リベラルなキリスト教，即ちユニテリアンに近いものであったろう。

（註）

1　清岡暎一編集・翻訳『慶應義塾大学部の誕生』（慶應義塾、1983年）によると，マコーリィは1890年10月に引っ越したようである（英文pp.75, 129；和文pp.72, 125）。筆者がハヴァード大学神学校図書館記録保管所で発見したマコーリィの1890年10月6日付けの友人フォックスに宛てた手紙には，「来週福沢の学校の構内に引越しをする」とあるので，10月半ばに移ったと見て差し支えないであろう。また会田倉吉『福沢諭吉　その人と生活』（日新報道出版部，1970年）によると，マコーリィが住んだ家はシモンズが住んでいた家で，マコーリィが出た後，福沢の女婿の潮田傳五郎が住み，続いて鎌田栄吉が塾長宅として明治35年以降15年間使用したという。（pp.123, 124）

2　会田倉吉『福沢諭吉』，p.224によると，息子のアーサー・ティラー・ナップは明治30年5月に義塾普通部英語学教授となったが，5ヶ月で辞任し，翌年5月に高等学科英語学の教授になったという。

3　ナップの本は、『ジャパン・タイムズ』の6月30日の社説で取り上げられたが、金沢在住の正統派の宣教師スノッドグラスがその社説に反論を加えたことから、7月7日、14日、15日、16日、27日の5日間にわたり，社説でナップの説が弁護された。ナップが「10回近くも」と言っているが,実際は6回である。『ジャパン・ウイークリー・メイル』も7月24日この論争を取り上げ、その後31日、8月7日の3回にわたり議論を展開した。そして最後の8月7

日にはスノッドグラスの論も掲載した。要するに，スノッドグラスの反論の主旨は，異教徒であったヨーロッパの人々がキリスト教に改宗したのだから，日本がキリスト教化しないというナップの論はおかしいというものであった。スノッドグラスによれば，キリスト教は高度な宗教で，日本の宗教は偶像教のため程度が低い。だから日本が程度の高いキリスト教に移行するのは自然の成り行きであるという。この論は当時のキリスト教正統派宣教師の典型的なものである。スノッドグラスとの論争が，果たしてナップが言う様に，“ユニテリアン論争”といった大袈裟なものであったか疑問である。

4 Don Brown, 'The Japan Advertiser: A Memorable Paper', *The Japan Times*, Wednesday, June 21, 1961, p.7. 長谷川進一編著『The Japan Times ものがたり』（ジャパンタイムズ，昭和41年）もこの点に触れているが，ナップのことを“クナップ”と誤って表記してしまっている。尚『ジャパン・アドヴァタイザー』誌に関することとして，わが国の労働運動の先駆者高野房太郎が明治29年（1896年）春帰朝後，このアドヴァタイザー誌の記者になっている。大島清『高野岩三郎伝』（岩波書店，昭和43年），p.31参照。

5 一太郎の手で英訳された福沢の手紙は以下の通りである。英文として文法上明らかに誤りと思われる部分（例えば,最後の行の“informations”は“information”にしなければならない）があるが、原文を尊重して、一切修正せずにそのまま掲載する。

Oct. 26th, 1895

Mr. George Batchelor,

Secretary of the American Unitarian Association,

Dear Sir:—In reply to your favour of Aug.23, 1895, I make following statements;

(1) The institution you speak of i.e. the American Unitarian Association of Boston is highly valuable for the people of Japan “as it is now conducted”, and I think there is not only no need of changing the method, pursued here at present, of the Unitarian Association, but the only proper course will be in more and more developing the very method. I deem it certain that there is need of perfecting present moral theory and practice of Japan. Consequently Christianity is quite as welcome as other forms of religion and especially Unitarianism, because, if I understand it correctly, (a) although outgrowth of Christianity, it is based on scientific principles and conducted by free inquiries

and (b) it is free of theological bigotry; — these two characteristics are especially attractive for the educated class of Japan.

(2) There has been no custom in Japan of making pecuniary contributions even for the common educational institution, much less for the theological seminary. Therefore Japanese must first become used to this custom, before "the prospect of enlisting the financial support of" our "own citizens" being realized, which means a course of time.

(3) The answer is implied in the preceding one ; i.e. You have to wait.

(4) As to some of the ways in which the institution can be made practically more useful, I have had a talk with Mr.MacCauley of whom you may get informations. I am sir,

Yours Very respectfully

Fukuzawa Yukichi per his son Ichitaro

6 『福翁自伝』(岩波文庫，昭和41年)，p.301。

7 稲城選恵『福沢諭吉と浄土真宗』(教育新潮社，昭和59年)，p.6。

8 福沢諭吉『福翁百話』(角川文庫，昭和36年)，pp.192-193。

9 比較思想史研究会編『人間と宗教：近代日本人の宗教観』(東洋文化出版，1982年)，p.68。

10 会田倉吉前掲書，pp.134, 135。

11 三並良『日本に於ける自由基督教と其先駆者』(文章院出版部，昭和10年)、p.476。

12 清岡暎一編集・翻訳『慶應義塾大学部の誕生』、英文p.55、訳文p.52。

13 拙稿「アーサー・ナップと日本ユニテリアン・ミッションの始まり」，『慶應義塾大学日吉紀要　英語英米文学』(No.35，1999年) 参照。

14 髙橋誠一郎『随筆　慶應義塾』(昭和45年、慶應通信)、p.64。

15 副田義也『教育勅語の社会史』(有信堂、1997年)、p.87。

16 同上、pp.99-102。

17 同上、pp.177。

18 金子堅太郎閣下講話『教育勅語の由来と海外に於ける感化』(大阪市役所、1936年) の引用した部分はpp.13, 29。金子の雑駁さは，晩餐会の席上で一人のアメリカ人女性が「耶蘇の十戒を読み，その後でこの日本の天皇の教育勅語を私が読んで…」(p.19) と言ったというくだりが記されているが，いや

しくもまともなキリスト者なら“モーセの十戒”を“イエスの十戒”などと言うはずがないのに，それに気付かなかったり，この女性が言った言葉をとらえて，「アメリカの晩餐会でアメリカ人が耶蘇教のバイブルと同等に教育勅語を視て子供に教へるといふ位だ」（p.25）と言って，この女性の言ったことを,まるでアメリカ人全般に言えるかのように話したりしている点などに見られる。その女性が言ったことは,金子に対する外交辞令のお世辞に過ぎないであろう。そもそもアメリカのクリスチャンが日本の天皇に忠孝を誓わせる教育勅語を自分の子供に教えるなどということは，常識的に考えてありえない。宗教はそんなに軽いものではない。金子という人は，宗教をこの程度のレベルでしか考えられない人であったと言われても仕方がないであろう。

19 G・B・サンソム『西洋世界と日本』下巻（筑摩書房，昭和41年），p.225。

20 大西祝“忠孝と道徳の基本”、『宗教』15号（明治26年1月），pp.110-118。また“教育勅語と倫理説”『大西祝全集　第六巻　思潮評論』（日本図書センター，1982年），pp.55-60も参照。

21 『ゆにてりあん』第2号（明治23年4月）、pp.45-47。

22 丸山真男『「文明論之概略」を読む　中』（岩波書店、1986年）、pp.161ff。

23 福沢大四郎『父・福沢諭吉』（東京書房、昭和34年）、p.173。

24 Joseph Pittau, Political Thought in Early Meiji Japan (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1967), p.118.　丸山の前掲書pp.239, 240によると、福沢は天皇の神格化批判を行っている。

25 拙稿「なぜ日本ユニテリアン・ミッションは伸展しなかったのか ── クレイ・マコーリィと日本ユニテリアン・ミッション(1) ──」，『慶應義塾大学日吉紀要　英語英米文学』（No. 39、2001年），pp.47-51。

26 慶應義塾基督教青年会『慶應義塾基督教青年会三十年史』（慶應義塾基督教青年会、昭和3年）、p.39。

27 ナップのバチェラー宛て1897年8月24日付の手紙によると，当時『ジャパン・タイムズ』は日本人スッタフのみで編集されていた。明らかな英文ミスも散見され，例のスノッドグラスからも執筆者が英語のネイティヴでないことを指摘されている。そうしたこともあってか，ナップの息子も，父親と同じくハーヴァードを出ていたので、英文をチェックするために雇われたのであろう。

28 『福沢先生哀悼録』（慶應義塾学報臨時増刊第 39 号、明治 34 年発行のリプリント版：みすず書房、1987 年）、pp.22-25。尚、同書に収められている『ジャパン・アドヴァタイザー』誌の 2 月 4 日，8 日，9 日の追悼記事（英文 pp.7-19。和訳 pp.319-322）は，ナップの手によって書かれた可能性が高い。1900 年にアメリカに帰国したため，福沢の葬儀に出席できなかったマコーリィの追悼の記事（*The Christian Register*, April 4, Vol.80, No.14）が福沢との個人的な関わりを述べているのに対し，アドヴァタイザー誌の記者は福沢との個人的な関係に一切触れていない。しかし 4 日に掲載された「品性の力」の中で，この記者がナップのバチェラー宛て 10 月 1 日付の手紙と似て，福沢の名声を天皇に次ぐと言った記述をしていることや，福沢の葬儀が仏式で営まれることで“異教的”で“救われざる者”（ lost ）と見なす一般のキリスト教的見解を批判している点でユニテリアン的である。この点から筆者は，記者がナップであろうと推定する。またナップが福沢の葬儀の時日本にいたと，筆者が考える一つの根拠は、*The Christian Register*, Feb. 17,1921 のナップ追悼の記事（p.20）に，ナップが 1897 年以来の長い日本滞在を終え，1910 年正月に帰国するまでの期間，彼がアメリカに戻ったのは 1903 年冬だけであったように記しているからである。『クリスチャン・レジスター』誌に載ったマコーリィの福沢追悼記事は，『慶應義塾学報』（明治 34 年 9 月）44 号“散録”に訳され，掲載されている。（pp.30-34）

29 土橋俊一『「修身要領」発表前後』（慶應義塾大学，昭和 62 年），p.23。

30 武田清子『人間観の相剋』（弘文堂，昭和 34 年），p.35。尚，福沢諭吉『愛児への手紙』（岩波新書，昭和 28 年）によると，明治 19 年 7 月 31 日付一太郎宛の手紙の中で，福沢は留学中の一太郎がキリスト教に入信してよいか問い質して来たのに対し，「是亦決して禁ずる所にあらず。」と返答している。（p.143）

Synopsis

Why did Fukuzawa Yukichi lose his interest in the Unitarians?
—Some new facts the letters of Arthur May Knapp reveal—

Hiromasa Tsuchiya

The Japan Unitarian Mission was in a crisis of getting no financial support from American Unitarians any longer in late 1896. Then, Clay MacCauley, its superintendent, went back to the U.S. in the next early spring to appeal to them. As a result, he succeeded in persuading them to support the Mission again. His return to Japan was, therefore, supposed to be a very happy one. But, in fact, he did not have "the pleasantest kind of a homecoming", because he had scarcely landed before he heard that he must leave his house as soon as possible. Fukuzawa had been waiting simply for his return to get him out. Keio-gijuku was expanding fast and needed the land on which his house stood, for dormitories to be built at once. MacCauley was perplexed. He could find no available house. In his own words, "Almost in despair I concluded to house myself for a time in our hall."

Why was Fukuzawa unwilling to supply another house to MacCauley? The answer was simple: he had lost his interest in the Unitarians while MacCauley was away.

The letters the former superintendent, Arthur May Knapp, wrote to the

A.U.A.(the American Unitarian Association) in 1897 reveal what happened to Fukuzawa.

Knapp returned to Japan "almost exactly synchronous with MacCauley's departure". Fukuzawa welcomed him warmly. One of Knapp's letters tells us that Fukuzawa took him into his confidence and regard more than ever. People called him the second Dr. Simmons, because up to the time of his death the latter had been for thirty-years Fukuzawa's most intimate friend and trusted counselor.

Fukuzawa had been contemplating changes in the organization of his university at the time, and asked Knapp for his assistance in the matter. Knapp's radical plan included the following ideas: that the institution would take upon itself an international character seeking a close affiliation with like institutions in America, and that the constitution would be altered so as to permit the appointment of Knapp, and other Americans to be named by him, to the Board of Overseers. Fukuzawa was pleased with his plan and talked of incorporating the Unitarian seminary, Senshin-gakuin into Keio-gijuku. He was confident that the A.U.A. would back up Knapp.

As Knapp feared, however, his scheme could not be carried out without the support of MacCauley, who was the representative of the A.U.A., since Knapp had no official position. Unfortunately the two were on bad terms. Consequently, the plan was not approved. Now we see why Fukuzawa was disappointed in Knapp, MacCauley and the A.U.A..

Less than a year later Fukuzawa had a stroke.